

新型コロナウイルス禍を予言した文学 その四

高嶋哲夫の『首都感染』 作家・文芸評論家 岡山典弘

新型コロナウイルスが、世界中で猛威を振るう。緊急事態宣言が解除されて、各種の行動制限が緩和され、人々は日常生活を取り戻しつつあり、経済活動の再開に軸足を移している。しかし東京では、連日新たな感染者の確認という憂慮すべき状況が続いており、第二波の到来も懸念される。いずれ人類の叡知は、パンデミックを克服するに違いない。その希望は、既に文学作品に描かれていた。

優れた作家は、未来を洞察する。中国で発生した「強毒性のウイルス」が日本に上陸し、首都・東京に蔓延する状況を、今から20年前の2010年に予見して、人類に警告を発した作品が刊行されていた。クラインス・ノベルの作者として定評のある高嶋哲夫の『首都感染』である。

高嶋が描く危機は、東京をマグニチュード8の直下型大地震が襲う「M8」、大地震による津波と原発被害を東日本大震災の前に予見した「TSUNAMI 津波」、超巨大台風が首都圏を直撃する『東京大洪水』、大地が震えて噴石が降り注ぐ『富士山噴火』など。さて、問題の『首都感染』は――

20××年、中国の北京で、サッカー・ワールドカップが開催されていた。世界32カ国から40万人のサポーターが訪れて、マスコミの数も1万人を超えている。この時、雲南省で致死率60%の強毒性インフルエンザが出現し、次々と人が死んでいった。「強毒性のウイルス」が北京に到達するのは、時間の問題である。北京に拡がれば、その被害は世界各国に拡散される。

しかし中国政府は、「強毒性のウイルス」の出現という深刻な事態を公表せず、隠蔽工作に取りかかる。「SARSのときは発表が遅れ、世界の非難を浴びました。そういう事態は二度とあってはなりません」

「この状況で発表を行なえばどうなる。我が国の威信は地に落ちる。何とかして、封じ込めるのだ。ここでわずかでも醜態をさらすようなことになれば、取り返しがつかない。体制の崩壊にもつながりかねないことだ」

「なんとしても封じ込める。外国に悟られるようなことがあってはならぬ。これは党の総意でもある」

(高嶋哲夫『首都感染』)

「なんとしても封じ込める。外国に悟られるようなことがあってはならぬ。これは党の総意でもある」

高嶋の筆は、人々の生命よりも国家と党の内部事情を優先させる中国に対して容赦がない。

現実世界においても、中国を見る各国の「眼」は厳しい。

3月、イギリスのジョンソン政権は、「中国が新型コロナウイルスに関して誤った情報を拡散し、自国の感染者数について嘘をついている」と非難した。

4月、フランスのマクロン大統領は、「新型コロナウイルスの中国での感染拡大に関して、「起きていながら私たちが知らないことが明らかにある」と述べ、中国政府による情報隠蔽を示唆した。

4月、ドイツのメルケル首相は、「中国がウイルスの発生源について、より透明性を持たず、各国がよりくわしく学ぶことができる」と中国政府に透明性を求めた。

果たして、中国は情報を隠蔽したのか？ 否か？ 真相の究明が望まれる。

「まさに歴史の逆行ですね。二十一世紀の黒死病だ」
黒死病とはペストのことで、十四世紀にヨーロッパで大流行した。

(高嶋哲夫『首都感染』)

「まさに歴史の逆行ですね。二十一世紀の黒死病だ」
新型コロナウイルス禍で、1918年から20年にかけて大流行したスペイン風邪(H1N1亜型インフルエンザ)と、中世に猖獗を極めた黒死病(ペスト)を、人々は想起した。

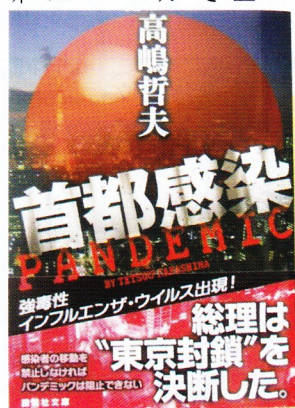
「現在、日本を含め世界は、いまだかつて経験したことのない未曾有の危機に直面しています。世界に広まっているH5N1新型インフルエンザは、過去の世界を巻き込んだどの戦争よりも、また過去に起こったどの自然災害、これまでのどのウイルスや細菌によるパンデミックよりも深刻なものとなっています」

(高嶋哲夫『首都感染』)

「現在、日本を含め世界は、いまだかつて経験したことのない未曾有の危機に直面しています」

新型コロナウイルス禍で、日本を含め世界は、いまだかつて経験したことのない未曾有の危機に直面した。

高嶋哲夫の『首都感染』では、首相が「首都封鎖」という強権を発動する。荒川と多摩川に沿って機動隊と自衛隊が配置され、橋は自衛隊の大型車両により封鎖される。環状八号線には、三十キロ余りにわたって有刺鉄線による停止線が設置され、越えようとする者は例外なく身柄を拘束される……。



今回、ゆるやかな自粛要請が一定の効果を發揮して、緊急事態制限が解除されたのは、日本人の民度の高さによるものであろう。